

今井源衛著 『王朝文学の研究』

福井, 迪子

<https://doi.org/10.15017/12201>

出版情報 : 語文研究. 30, pp.51-54, 1971-03-31. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

今井 源衛 著

『王朝文学の研究』

福井 迪子

本書は平安朝初期から源氏物語までの物語を中心とした論考二十五篇を、著者の研究生活二十年余の数々の御研究の中から選び、一書にまとめられたものである。すべて公にされたものであるが、あるいは「文学研究」「記念論文集」等発表誌の性質上必ずしも大方の目に触れ得なかつたと思われるものも含まれており、こゝに論文集として出版の運びとなつたことは、王朝文学の研究に連なる後進にとつて真にありがたいことであつた。

その構成は、第一篇 物語の様式（物語文学論・物語構成の一手法）、第二篇 天曆以前（漢文伝の世界・在原業平・伊勢物語・伊勢物語百一段について・戒仙について）、第三篇 枕草子とその時代（清少納言の生きた時代・清少納言の美意識と体験・枕草子の特質・枕草子の享受・花山院のこと・仲文集試論、第四篇 紫式部と源氏物語（紫式部の出生年度・紫式部本名香子説を疑う・晩年の紫式部・為信集と源氏物語・紫式部集の復元とその恋愛歌・源氏物語と紫式部集・源氏物語の文学史的位置・源氏物語の享受）及び資料篇（「幻中類林」と「光源氏物語本事」・「源氏のゆふたすき」と「源氏六十三首之歌」・古注「大和物語

鈔」考・枕草子の古注釈書）から成り、最後に「論文掲載誌一覧」及び「索引」が附されている。

はしがきに「各論の問題の立て方や追究のしかたも多種多様である。たゞ、おおむねのところは実証を旨としたとだけは言えようか。実証はいうまでもなく広く学問の根底であろう。とはいつても、それを狭く文献万能と同義とは考えたくない」とその研究の姿勢について述べられている。仮りに本書に収められた論考を、その発表年代順に置き換えてみると、終始方法を探りつゝ、研究の幅と深さを加える努力を積まれた著者の二十年の歩みの一端を窺うことができるように思う。勿論本書の二十五年論考のみで云々できる問題ではないが、初期の、概して歴史の流れの中でその性格を捉えられる方法、文学論的な論考から、三十五年頃を境として文献学への関心の深まりが窺え、厳密な文献批判、緻密な実証とその裏付けとなる豊富な資料の駆使、精緻な解釈を方法の基盤として、テーマに応じて、その基本的な歴史的社会的背景を噛み合せる態度の上に、様々な角度からの検討が総合的に加えられている。又、著者は、「本書の

中心といえなければいえるものは「紫式部と源氏物語」篇であろう。そこに収めた八篇とつぎの資料篇に収めたものの中の源氏物語関係二篇は「源氏物語の研究」所収論文に続くものであり、またそれらは、前の小著「紫式部」出版と前後して発表したものが大半で、その脚注的役割を果すものでもある」と述べられる。それは四十年から四十三年にかけての御論考で、「源氏物語の研究」の方向を大きく進められ、幅を広めて歩んで来られた著者の足跡の集約である。二十五篇の御論考の一つ一つについて忠実に御紹介すべきであるが、限られた紙幅の関係もあるので方法的に共通するものを若干のグループに分けて述べさせていたゞく。

一、物語文学論 物語全般を扱った「物語文学論」では、物語文学に於ける作者の主體的側面が創造の基本的エネルギー源として見落されてはならぬこと、物語文学に於ける主題の史的発展、古代的散文性について論及されるが、民俗学的方法或は物語の享受の様式を重視する考えに對して、かなり批判的な姿勢を示している。そして基本的には歴史的社会的見地から独自の見解を述べられたもので、本書の総序としての役割を果たすと共に著者の立脚する物語研究の基本的姿勢を明らかにされたものである。

二、前者の発展として物語形象化を史的にたどられたものに、「漢文伝の世界」「在原業平」「伊勢物語」の三篇がある。「漢文伝の世界」は、正史実録の伝を最右翼とすれば、伝奇は九・十世紀に於ける漢文散文群の最左翼に位置する一群であることを形態・性格面から具体的に立證され、従来を考えから一歩進め

て広い視野から捉え直すことを述べ、それが八・十世紀の漢文伝の歴史的展開にも対応することに論及される。「在原業平」は、業平像の史的展開を六国史・古今集・伊勢物語とたどられた論考で、六国史兼卒伝記の性格を明らかに、その評語についての用例を精査することによって国史編纂者の立場・意識に立っての確な解釈をふまえて官人のとらえた業平像を探り、更に業平像の陰影を深めた古今集の独特な詞書から、虚構を加えて、恋の英雄としての理想像の一代記が成立する伊勢物語の形象化への問題を、作者及び時代性の要求からとらえられる。

三、物語史展開の中に研究を進められるものとして「物語構成の一手法」があげられる。学窓を巣立たれた若き著者の最初の論考である。王朝貴族の実生活に根ざした「垣間見」が物語や説話類に多くみられる事実から、その性格・構造を探り、物語に於て「垣間見」は、表現上客観性を獲得するための一手法であり、構成上合理性を与え、物語展開の重要なポイントに位置させられていたことを、物語個々について検討され、史的展開を跡づけると、概念的―写實的―劇的と発展し、源氏物語をピークとして、末期には長篇の中からその部分のみが切り離されて一つの短篇物語に化するに至る、と小説手法の歴史的流れの中にその性格を捉えられる。

四、考証を主とするものとして「紫式部の出生年度」「晩年の紫式部」「戒仙について」等があげられよう。言うまでもなく実証を旨とする御研究である。「紫式部の出生年度」―紫家七論の誤読にもとづく通説の誤りの指摘、日記中に見える年令についての記述十項の検討と日記中の従来難解とされてきた寛弘六年

の、近い将来老眼に陥る危惧を述べた「めくらうて」を善本松平本によって解され、医学の見地からの科学的解明の方法導入によって独自の御見解を展開される。「晩年の紫式部」―上東門院に於ける紫式部の位置、また紫式部が小野宮実資に好意的であったことを確認し、小右記長和元年五月二十八日から翌年八月末にかけての精読によってそれが背後に於ける政治的・感情的諸事情の考証による推定把握から、又更に伊勢大輔集に紫式部が長和三年正月までに宮廷を退いていたとみられる材料のあること、その他から恐らく長和二年秋に紫式部は道長によって宮廷から追放されたものであらうとの結論を導き、「道長公妾」説を、実資―式部―道長の関係から否定される。また、記録や文献を正しく読むという面において共通する論考に、角田文衛氏の紫式部本名香子説に対する批判の「紫式部本名香子説を疑う」がある。「戒仙について」―大和物語に見える「戒仙」についての考証である。通説に従った考証に加えて、「大和物語鈔」の説を逐一史実に徴して検討され、その誤りを明らかにし、通説が正しく、父「兵衛佐」は在原棟梁と推定される。更に古今集において業平の占める位置の大きさは、彼の歌の偉大さのみに掃せられる問題ではなく、貫之・友紀ら古今集撰者が棟梁やその子らと親交のあったことに具体的な経緯を推測できるのではないかと論及される。史実に密着した実証考証である。

五、文献学的批判を主とするもの「紫式部集の復元とその恋愛歌」―紫式部集諸本の厳密な再検討によって、一・二類分岐前・後の損傷錯簡を明らかにされ、宮仕え以後における紫式部の心境を家集・日記によってたどり、家集後半に配された恋

愛歌群との不調和について追究される。そして家集の可及的な復元を試られる精緻な文献的操作と解釈学的追究による論考である。「源氏物語と紫式部集」―源氏物語・紫式部集の和歌を用語・表現・内容面から比較し、その執筆の前後について考察を進め、互に材料となり合っていることからその巻の執筆年次・歌の詠作年次推定の手がかりとなり、従来その執筆に疑問のある竹河の巻も、家集に類似歌のある点から紫式部に無関係なものではなからう、との推論を下される。物語各巻の成立や家集成立の年代的関係がつきとめられず、進まなかった従来の研究上の盲点についての試論である。「為信集と源氏物語」―為信集の用語を手がかりとした家集成立年代の推定考証、為信の輪廓について家集の内部徴証からと諸記録の細緻にわたる検討により、従来問題とされてきた紫式部の祖父藤原為信とは別人であるとの解決に及ぶ。更に家集中の源氏物語に密接な関係歌をあげて、その影響関係を検討し、為信集はその成立年代と相俟って、源氏物語一部二部から材料を得て作歌したものと結論される。史実考証と文献批判面からの論考である。

その他「源氏物語の享受」及び「枕草子の享受」も基本的には研究史研究による享受史の把握から、多角的検討を加えられつ、広範な資料を用い論ぜられている。後者に於て、従来引かれたことのなかつた正徹物語・山鹿素行本枕草子・金沢文庫第一号文書中の女房消息等、新しい資料の使用に注目させられる。また「伊勢物語百一段について」は、「古代貴族社会はそれなりに批判的意識を個人の中に成長させていた」という著者の基本的考えを前提として、中世の研究史をふまえての松尾聰・片桐

洋一氏両氏に對する反論である。

六、以上の様な考証を旨としたものではなくて評論的なスタイルのものとして、枕草子の耽美的感覺性・主観性・和歌への関心について述べられた「枕草子の特質」、貴族的な美意識の体系からはみ出す原体験についても本能的に無関心でいられなかつた清少納言の豊かな感覺について述べられた「清少納言の美意識と体験」及び「仲文集試論」がある。「仲文集試論」は、仲文集―巧みな俳諧・虚構の要素、物語化が著しく贈答歌にも加虐性や道化が目立ち、乾いた笑いと冷たい目が特徴の―について物語研究者としての立場からの、新しい私家集の扱いとして異色ある論考である。

七、資料篇 いずれも新資料の紹介である。「幻中類林と光源氏物語本事」―天理図書館蔵「幻中類林」と松平文庫蔵「光源氏物語本事」の両書が同一書であることについての論考。「源氏のゆふだすき」と「源氏六十三首之哥」―松平本「豎横和歌」所収の「源氏のゆふだすき」、「源氏六十三首之哥」全文翻刻とその解説。「古注「大和物語鈔」考」―現存する季吟の「大和物語抄」以前の古注釈書四書、即ち高橋正治氏蔵(旧松平文庫蔵本)・内閣文庫本・国立国会図書館本・素行文庫本についての詳細にわたる説明。「枕草子の古注釈書―素行書写本について―」―素行筆、現存唯一の中世に成つた古注釈書「枕草子」についての解説。

本書を読み終えると、今更のようにその御論考の重厚さと精緻さと広さに圧倒される思いがする。そしてその多角的な御研究から、私共は数々の示唆を受ける。これを如何に研究の糧と

して得て行くかが私共後進に課せられた当面の問題であらう。

昭和四十五年十月十日角川書店刊

.....
受贈圖書 45年4月、46年3月(一)

徒然草通説批判

松平文庫本光源氏一部譚上・中・下

細川文庫本藤原義孝集

細川文庫本山家集

細川文庫本よるのつる

方言研究年報第11・12卷

遊子方言語形索引

松平文庫本慰草

太宰府天満宮蔵書目録

満州語国語基礎語彙集東京外大アジア、アフリカ言語文化研究所

善本写真集32・34

王期第二・三冊

岐阜大学教育学部郷土資料1

演劇博物館図書収蔵品目録15号

国立国語研究所報告35・37

芸能の科学

訓点語と訓点資料41・42輯

山鹿素行写大和物語抄

東北大学見本類

狩野文庫本大和物語上・下

祐徳神社蔵枕草子一、五

古活字十行本

井手 恒雄

今井 源衛

今井 源衛

今井 源衛

今井 源衛

奥村 三雄

奥村 三雄

三浦 三夫

太宰府天満宮文化研究所

天理図書館

王朝文学協会

岐阜大学教育学部

演劇博物館

国立国語研究所

東京国立文化財研究所

訓点語学会

今井 源衛

今井 源衛

今井 源衛

今井 源衛

今井 源衛